

杉の間伐材使い、基礎工事

軟弱地盤補強へ実験

「日本建設技術」(唐津市、原裕社長)は、杉の間伐材を使った軟弱地盤補強工法の実証実験を佐賀市川副町で始める。杉材を「イカダ状」に敷き詰めて地盤を強化させる工法で、堤防や道路の基礎工事として使えるかのデータを収集する。現在主流のセメントを使った工法と比較して耐久性が認められれば、間伐材の有効活用につながる「環境に優しい工法」として注目されそうだ。

唐津市の建設技術
日本建設技術

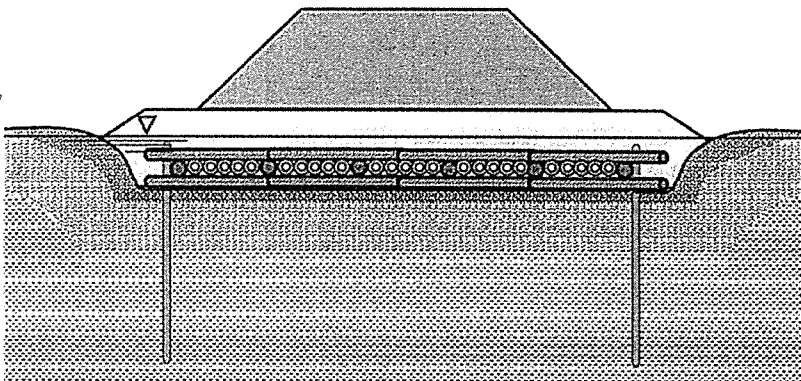
実験は真地域産業支援センターの助成を受け、川副町の佐賀空港内の干

佐賀空港内の干拓地で

拓地で15日から実施。12降、セメントと土を混ぜ四方の敷地のへりに木杭(直径20センチ、長さ6メートル)を打ち込み、その上に木材(直径20センチ、長さ4メートル)約420本を敷き詰めて複数の層をつくって盛り土する。10月中旬までに工事を終え、盛り土の沈下幅、地層内の水圧、周囲の変化などのデータを約8カ月間集める。

工法の名称は「ソフト&パイル工法」。同社が、佐賀大学の林重徳名誉教授と共同研究して2007年4月に特許を取得した。

間伐材を使った軟弱地盤補強工法「ソフト&パイル工法」のイメージ図



林教授によると、木材を使った基礎は江戸中期の有明海堤防や鹿児島島の石橋に使われ、木材が水に漬かっていけば数百年経過しても腐食しないと

いう。ただ1960年以降、

原社長も「軟弱地盤での施工後に起りがちな道路の波打ちが解消できるかもしれない。セメントに比べて環境負荷がはるかに少ない。古くて新しい木材基礎を普及させる一歩になれば」と意気込む。(大田)

林教授は、佐賀県が有明海沿岸を中心に地盤が弱く、佐賀市草土町などには人工林が多いことを挙げる。輸送に手間がかかるため、間伐材が放置されている現状を指摘し、「低平地の護岸、堤防、防災道路に間伐材を使えば、森林管理と林業支援にもなる」と話す。